

《話題提供》

トランス・ラーニング (Trans-Learning)

立命館大学産業社会学部 准教授
博士(建築学) 永野 聡

立命館オンラインセミナー
2020年9月27日

トランス・ラーニング (Trans Learning)

反転授業を発展させた、独自に開発したメソッドである。教員が教育テーマとコンテンツを事前に学生に提供し、学生が自らテーマとコンテンツをもとに情報収集と教育コンテンツの作成を行う。自己学習を通じて作成した教育コンテンツを活用してクラスメイトに対して学生自身が授業型プレゼンテーションを実施し、その内容に応じて質疑応答・議論を行うことで、学生個々人の能動的な学びを実現し、また学生同士の相互理解を促している。教員・TAは質問やファシリテーションに注力し、学生の能動性を引き出すことに注力する。

従来型の研修

講義



宿題・自主学习

トランス・ラーニング

事前学習・調査



他学生への講義・質問

知識の相互補完を通じた
相互能動的学習



提供テーマに基づいた事前調査

学習意欲・オーナーシップ
の向上と学習定着化

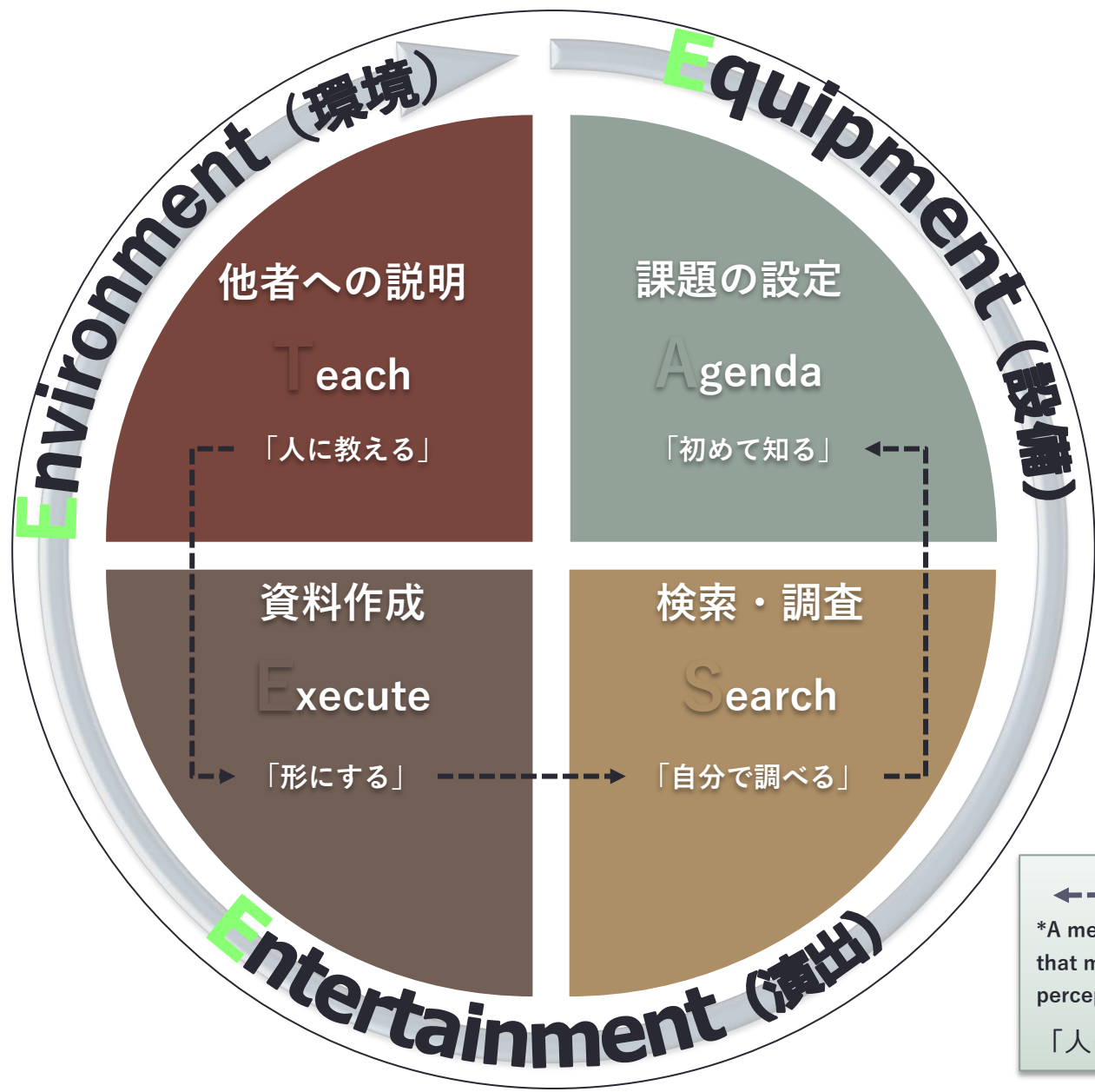


チーム・ラーニングとチーム・ティーチング

研修担当者の
負担軽減



講師の技術に依拠しないクラス運営



Equipment (設備)

- ・グループワークに適した部屋
- ・プレゼン設備
- ・音源

Environment (環境)

- ・議論可能なフラットな空間
- ・教職員とのフラットな人間関係
- ・発言しやすい安心・安全な環境

Entertainment (演出)

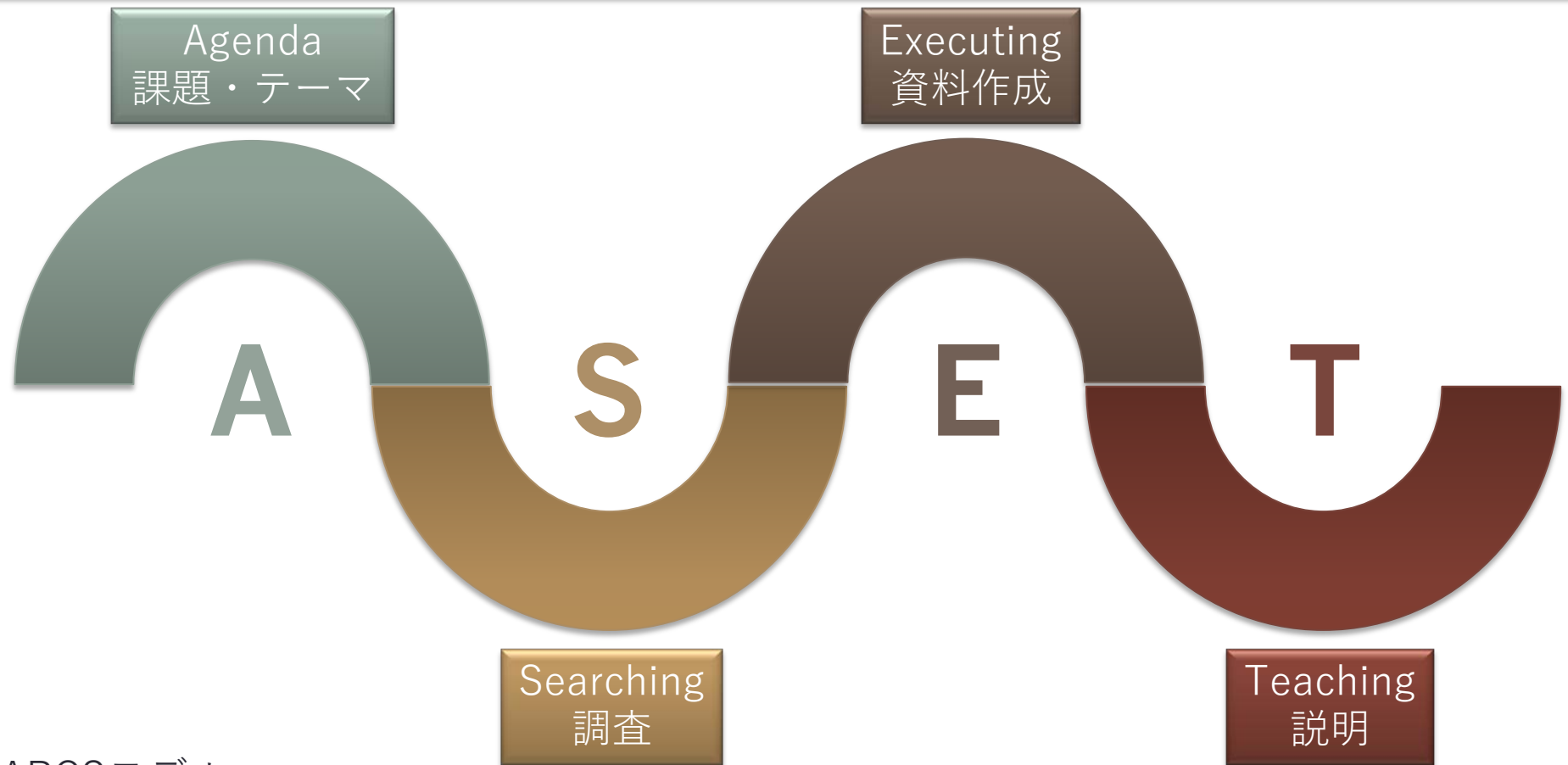
- ・楽しみながら学ぶ工夫
- ・自発性を引き起こすアジェンダ
- ・ポジティブなやり取り

← Psychological Feedback*

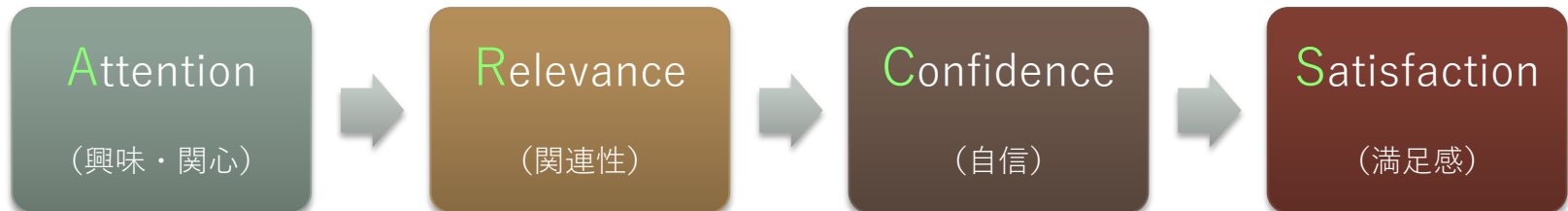
*A mechanism of information stimulus and response that may control subsequent behavior, cognition, perception, or performance.

「人に教えるなら、ちゃんと理解しないと」

ARCS（アークス）モデルに基づくTrans-Learning



ARCSモデル



ジョン・ケラー JOHN M. KELLER が1983年に提唱したA R C Sモデルは、インストラクショナルデザイナーが学習意欲の問題に取り組むことを援助するシステムモデルである。学習意欲の問題と対策を、注意 ATTENTION・関連性 RELEVANCE・自信 CONFIDENCE・満足感 SATISFACTION の4要因に整理した枠組みと、各要因に対応した動機づけ方略、ならびに動機づけ設計の手順を提案したもの

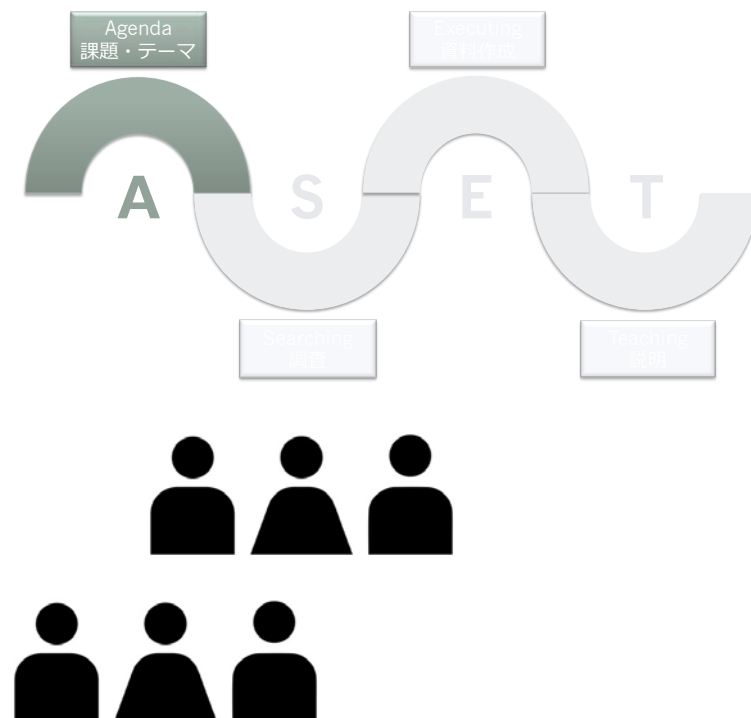
Stage 1: Agenda for Attention

「初めて知る」

ー興味・関心を喚起するテーマ設定ー



テーマの提供



興味・関心の醸成

Environment

- 正誤のない自由でオープンな発話の環境
- 前提知識のない学生でも発言できるやわらかい問いかけ
- チームビルディング

Equipment

- 動画、音声や実物など、学生の五感を刺激するメディア
- 対話・会話が進みやすい机・椅子のレイアウト

Entertainment

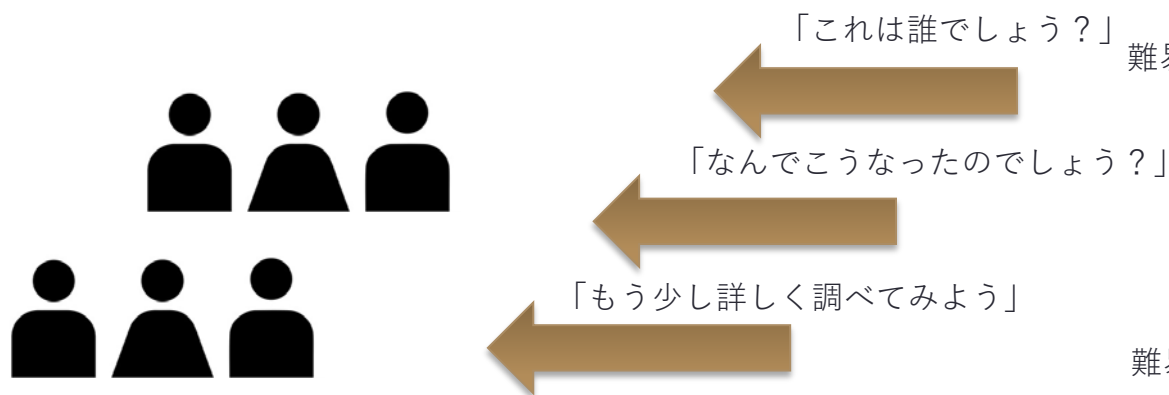
- 学生がテーマを身近なものに感じられる導入施策（格好いい映像、美味しい食べ物、楽しめるクイズなど）
- **興味を喚起する具体的な事例**

例：「ソーシャルデザイン論」第1回の導入動画とクイズ

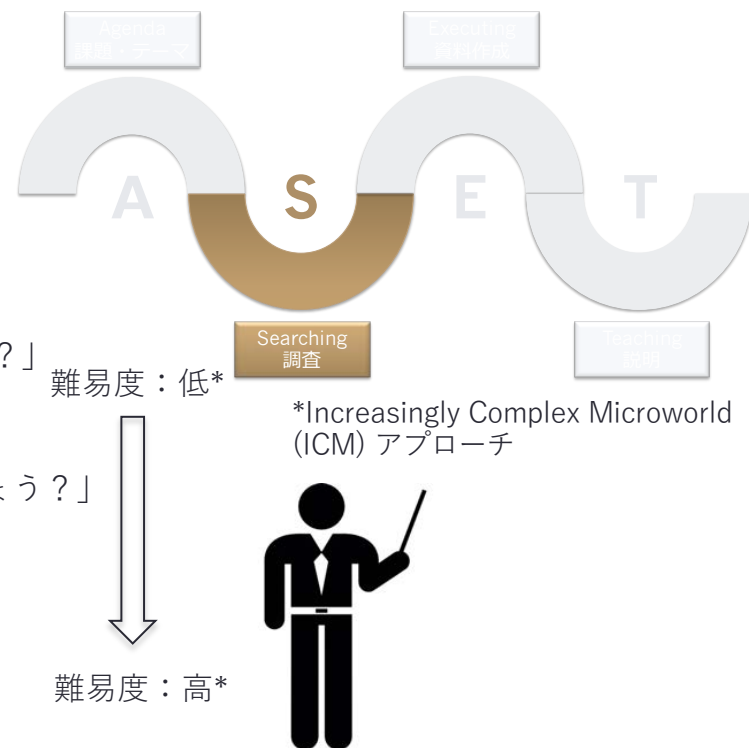
Stage 2：Search for Relevance

「自分で調べる」

ー学習活動を通じて関わりを感じるー



テーマに関わる自己調査学習の開始



難易度：低*

Searching
調査

*Increasingly Complex Microworld
(ICM) アプローチ

難易度：高*

Stage1で興味付けを行った後に

Environment

- 個人で負荷を抱えないチームワーク形式
- 気になったことを自分で調べたくなるような問いかけ

Equipment

- 学生自身が検索・探索することができるメディア（携帯・パソコンなど）
- 検索・探索したことを書き残す模造紙、パワポ、携帯メモ

Entertainment

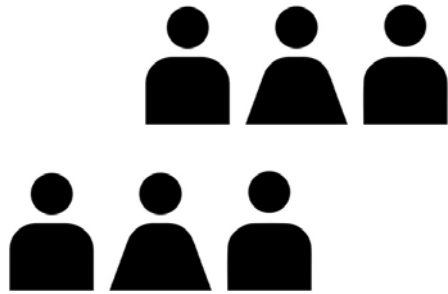
- **初期は興味を喚起する具体的な事例に関連する調査**
- 身近な事例の背景にある面白さ、興味深さの演出

例：「ソーシャルデザイン論」第1回の前澤氏事例

Stage 3：Execute for Confidence

「形にする」

ー調べたことを自分なりにまとめ自信をつけるー



初期は授業時間を使ってワーク*
「授業中にチームでまとめて」

状況を見てホームワーク化*
「来週の授業までにまとめて」



*大講義型科目や多学部混合の科目の場合は、学生が自主的に集まりづらいいことを考慮。少人数科目の場合は状況を見て、ホームワーク化

他人に教えることを前提にチームでまとめる

Environment

- 個人で負荷を抱えないチームワーク形式
- 消極的な学生を否定せず、能動的な学生を賞賛

Equipment

- 学生自身が検索・探索することができるメディア（携帯・パソコンなど）
- 発表形式の資料作成ソフト

Entertainment

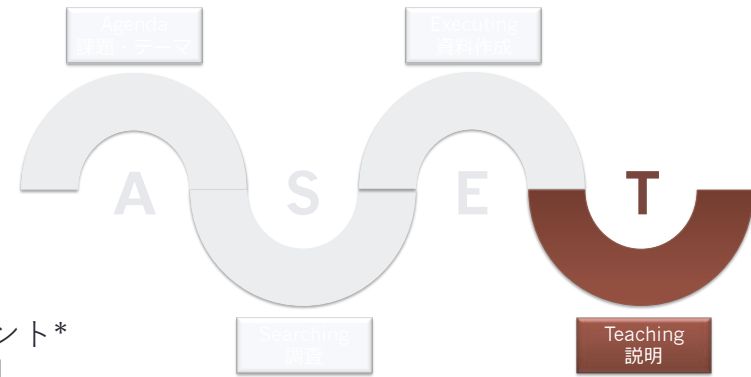
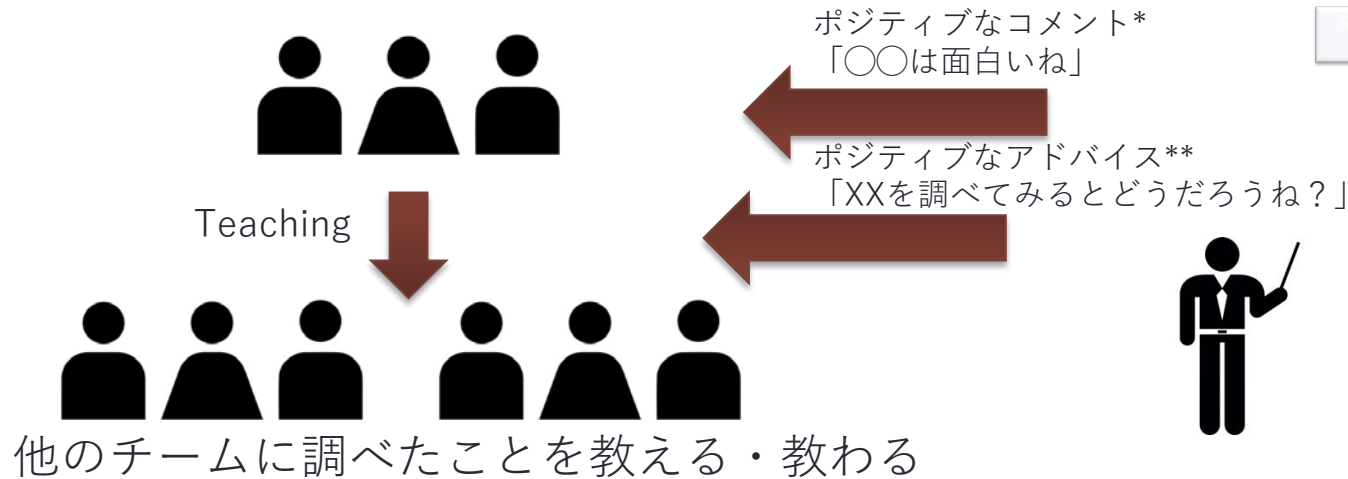
- 初期は興味を喚起する具体的な事例に関連する調査から新たに知ったことを人に教えたいという気持ちを後押し
「よく調べたね」など

例：「ソーシャルデザイン論」東京五輪についての自己調査参照

Stage 4：Teach for Satisfaction

「人に教える」

「知らない人に教えることで満足感を得る」



*知らなかったことを調べてきたことに対するリスペクトを示す。やる気を継続させるように促す

**調査の深さが足りない場合や、調査の切り口がイマイチの場合は、否定せずに、深め方や学生が気づかないような切り口を示し、フォローアップを促す

Environment

- 発表ではなく、「教える・教わる」環境設定
- 大講義の場合は、2、3チームずつに分けて、教え合いを実施

Equipment

- チームの中の1名はPC、タブレットを持参
- 少人数・少グループの場合は先生のパソコン使用も可

Entertainment

- 初期はTeachingに躊躇する学生もいるため、教員主導で事前に場を温める (IceBreakなど)

例：「ソーシャルデザイン論」第2回授業参照

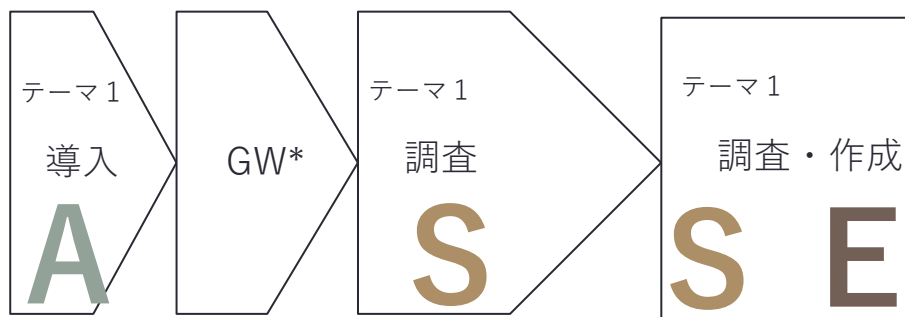
Trans-Learningに基づいた授業デザイン案

授業1日目

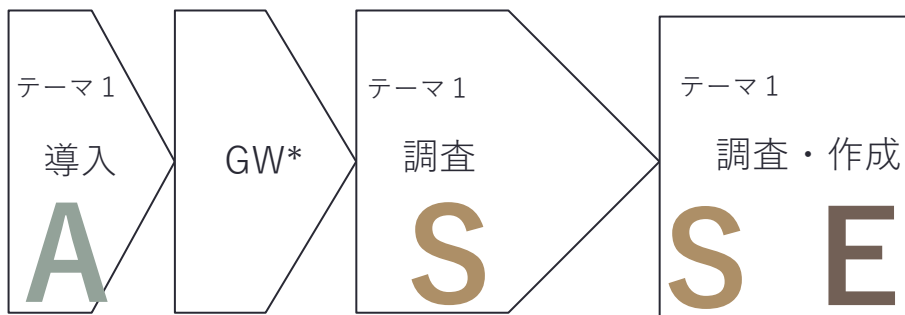
ホームワークがなく、テーマが1回で終了した場合



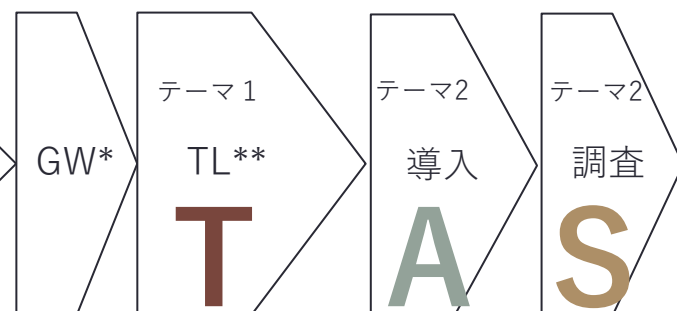
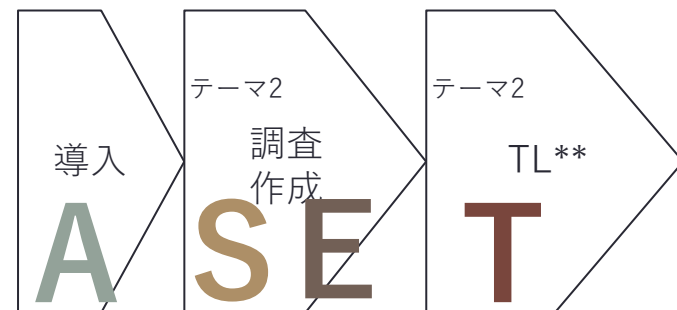
ホームワークがあり、テーマが1回で終了しない場合



ホームワークがあり、テーマが1回で終了した場合



授業2日目

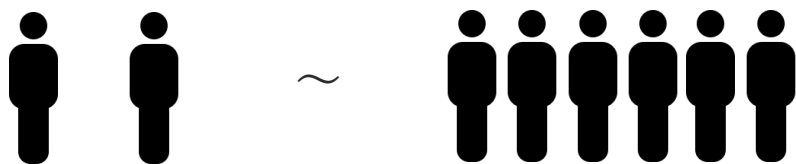


* GW：グループワーク、自己紹介やIceBreakとしてのワーク
**TL：Trans-LearningにおけるTeaching

Trans-Learningに基づくクラス運営案

①1チーム2名～6名

- ・ 多い場合、離脱者が増
- ・ 少ない場合、個人の能力に依拠



②TA・SAを活用したクラス運営

- ・ 2年目以降
- ・ 2、3チームに1名のTA・SAでも可



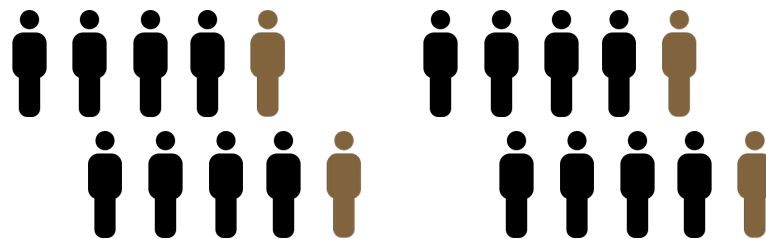
③コンタクトパーソンの選定

- ・ 1チームに1名
- ・ TA・SAでも可



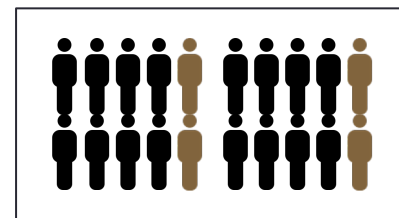
④少人数クラス運営

- ・ 20名以下の実践型科目
- ・ 1チームのTeachingを残りの3チームが聞く



⑤中人数クラス運営

- ・ 50名程度の座学型科目
- ・ クラスを分割し、④と同様（TA・SAが要）



⑥大人数クラス運営

- ・ 100名を超える座学型科目
- ・ 隣のチームとペア（定期的に入れかえても可）
- ・ 中人数の場合も可能

